
～テイルズ オブ シンフォニア～あの日の、記憶。

Ic-hi✂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゝテイルズ オブ シンフォニアゝあの日、記憶。

【Nコード】

N7217N

【作者名】

Ic-hix

【あらすじ】

——二人で歩いた思い出。

——遠い日の記憶。

—Tales of symphonia is start
ed from Iselia.

シンフォニアの本編の小説の回想シーンをコレットとロイドの過

去の物語で綴った、短編小説。

——あなたが好き。いつだって。ずっと、ずっと……。

コレット達が出逢ってから、数年が経った――

「……誕生会、楽しかったねっ！」

「ああ！ でも……。これでまた、二つ離れちゃったな」

ブロンドの髪の少女の後に、右側に居る鳶色の髪の少年は少し残念そうに言葉を返した。木の家の壁は二人の楽しい会話をより暖かく彩っている。

少年と少女は部屋に一つだけあるベッドを背後に背をもたれ、隣り合って座りながら話をしていた。

下の階では少年の父ダイク、二人の親友ジーニアスに、担任教師のリフィルが盛んに話している。二人の耳に声が――遠く。微かに――聞こえてくる。

「……いいよ、そんなの！ どうせわたしも、もう少ししたら十六の誕生日が来るから。ロイドは気にしないで」

少女がにこやかにそう言うってから、暫しの静寂と沈黙の間二人は言葉に詰まる。一階からの明かり――二人をほのかに照らす。正面の窓、右側のベランダ、から入る星と月の銀色の光――がロマンティックに部屋中を彩った。

ロイドと呼ばれた少年には伝えがたい事があった。今夜は彼女の家には誰も居ない日らしく、それは幼なじみとして親友として、彼女に好意を抱く異性としての真心だった。

「――あのさ」 少年は何処ともなく、あまり高くない天井を見上げながら口を開いた。

「……ん？ なあに？」 少女は少しぼんやりとした様子で、問いを返しながら首を傾げて彼を見た。

少年は恥ずかしさからか「今夜……、もう遅いし泊まってかないか？」と、あまり聞こえないような虫の鳴くような声で訊いた。

しかし彼女は聞こえなかったのか驚いたのか、「えっ……？」とこぼして目を丸くしながら首を傾げる。

「あの……、ごめんね。今の、もう一度お願いできるかな？ 聞こえなくて――」 少し間を空けて少女は申しわけなさそうに照れ笑いしながら、月明かりに照らされた彼の琥珀色の瞳を見て言った。

少年は彼女が言い終わった瞬間に「ああ、いいんだ！ やっぱ、何でもねー！」と焦った様子で早口言葉のように言うのと、下を向いてしまった。

少女はクスクス笑いながらそれを微笑ましく見ていたが、結局親友とその姉と少女は三人で帰ってしまう。

――本当はね、知ってたのかもしれない。あなたが何を言ったのか。

言葉が言葉で誤解を招きたくなくて、何も壊したくなくて、二人は伝えられない。言葉に出来ない事が多くあった。

次の日――

水色の服の背の小さい少年が、赤い服の少年と二人で学校で一つの机を椅子で挟んで話していた。

周りでは既に何人か他の生徒も教室を走り回ったり、色んな年齢層の生徒が一時限前のつかの間の自由時間を満喫していた……。

「——ダメだなく、ロイド！　そこまでいったのに、引き留められなかったなんてさ……」

「は？　な、なんだよ！　ジーニアス、その口振りは……。まさか——」

どうやらこの二人は昨晚の話をしているらしい。茶化すように言われた彼はムツとして言い返すも、何かに気づいたように言葉を詰まらせた。

ロイドはふと、窓の外へ目をやる。その視界に——コレットが青いリュックを背負って、楽しげにスキップしながら、校舎へ入る姿——は彼女が見えた。同時にジーニアスも横目でそれを確認し、わざと大きな声で話した。

「あつれ〜？　僕はてつきり、ロイドがコレットを好き——」

「ジーニアスっ……！！」

ジーニアスがからかうような口調でロイドにそう言い掛けると、ロイドは軽くげんこつを頭に落とし、それを遮った。

「いてて……」　ジーニアスは頭を抑えた。

ロイドは次には必死に「コレットは友達だ！　——心配してたんだよ、俺は」と言った。一方のコレットは教室に入り二人の姿を探す。それを彼らは見る。

ロイドは胸をなで下ろしたかのような思いで、ため息をつき、うなだれた。

「——ロイド、ジーニアス、おはよー！」　コレットは満面の笑み。

いつものように二人に挨拶しながら、ロイドの隣の席についた。

二人も「おはよう！」と笑顔で挨拶を返すと、コレットはリュックから教科書などを出して授業の準備をし始めた。

ジーニアスはロイドの机の上の端の落書きや、机の中を覗きながら呆れたような顔をする。

「ロイドって、勉強道具持ち帰ってないでしょ……」

「おう！ よく気づいたな！ 給食用の野菜ふりかけ。それに体育着と図工の道具に木刀だけ持ち歩いてるんだぜ。ほら、ノイシュも重いだろうし」 ロイドはジーニアスに得意げに返答した。

ジーニアスは目を点にして、完全に呆れきったように「そんなのへ理屈だよ……。はあ……。だからロイドは勉強出来ないんだって」と霞んだ声で返事をする。と席を前に向けた。

「——皆さん、おはようございます！」 張りのある挨拶が教室の入り口から聞こえてきた。

みんなが一斉に「リフィル先生、おはようございます！」と言うと、皆が席に着くのを確認して教壇に上がった……。

「はい皆さん、おはよう！ 最近校舎の損傷が著しいので、これ以上壊さない事……。良いですね！」 リフィルは手帳を見ながらそう言う。と、やんちゃ坊主の主犯格であるロイドを見た。

みんなが返事をする中、ロイドはしまったという様子で顔を背けていた……。

「……よろしい。——では、一時限から二時限は環境学ですから、課外授業です。動きやすいなら私服で構わないわ」

リフィルはそう言うのと教壇を降りて、ロイドの方を見た。

「……ああ、それからロイド」

「はい！」

ロイドが席を立てて返事をする。「いつもチャンバラごっこをしているようだけど、課外授業の間は木刀は置いていくこと」と言つて、彼女は準備を始めた。

「え〜〜!?!? 先生、そりゃないよ……」

軽く落胆しながら鞘ごと木刀を腰の革紐から抜いて置いた。そんな彼を見て、ジーニアスとコレットは笑っていた。

一時限目——

「おーい！」

緑溢れるイセリアの村の外れで課外授業から抜け出して、草原を駆けずり回る少年が居た。

「あ! ロイド!」 草原の一輪の花を眺めて座り込んでいたコレットは振り向き、彼の姿を見て微笑んだ。

「ダメじゃないか。班からはぐれたりしたら。リフィル先生が心配して捜してたぞ」 ロイドは彼女に歩み寄りながら、柔らかな声のトーンで言った。

コレットは口元を両手で抑えてクスクス笑いながら「——ロイドだって」と、可笑しそうに投げかけた。

ロイドは呆気にとられて目をパチクリさせながら、「は？」とポカンとした様子で言うとその直後に続けた。

「俺は、おまえが心配で捜しに来たんだよ」　ロイドはそう言うのと、隣に座った。

「……ありがとう。くじ引きって、不公平だよね！ 私。——友達いないのに……」　コレットは一輪の花の葉を指で撫でながら、愛想笑いをする。そして冗談を言うが語尾に行くにつれ、表情が悲しそうになる。

ロイドは驚いたように目を大きくした。そしてニコツ、と微笑みかけてコレットの頭にポンと左手——赤い手袋をした手。その左手には左手甲を覆うような白い布が巻かれていた——を添えた。

コレットは一瞬、驚いたように身をすぼめた。しかし身体に無意識に入った力を抜き、その後少し頬を赤らめた。

「ジーニアスだって、俺だって。——友達だろ？　コレットが独りで居たら、そこがテセアラだって駆けつける」　ロイドは笑顔を見ながら、柔らかい声音でそう訴えかけた。

「ホント？　嬉しい……。——ロイドが来てくれたから、もう寂しくないよ」

コレットは嬉しそうに頬を赤らめて微笑むと、そう言って青空を見上げた。暫しの沈黙の中——花の薫りや鳥の囀り（さえずり）。風の吹く音——に自然の音が時を刻む。

「あの、さっきはごめんね！ ロイドっていつも班別行動の時、授業から抜け出す事あるからさ。てっきりまた、そうかと思って……」 コレットは青空を見上げながら、楽しそうにそう言うとき少し曇った表情になった。

ロイドは照れくさそうにヘラヘラ笑いながら、コレットの隣で頭の後ろに両手を組みながら草原に寝転がった。琥珀色こはくいろの瞳は一瞬の表情——青空の下にある彼女の、少し曇った様子の横顔——を捉えた。

ロイドの顔つきが変わった。彼は身を起こし胡座あぐらをかきながらコレットの横顔を覗き込んだ。

「——あのね。ロイド」 コレットは少し真剣な表情。間近にあるロイドの顔の方に、顔を向けてかしこまった様子で言った。

「ん？」 ロイドは少し顔を離してから、返事をした。

コレットは申しわけなさそうに「あの……。ロイドの誕生日の事、——ダイクさんに昔の話を聞いてから、四年間ずっと訊けなくて」と視線を落とし、うつむき加減に言った。

ロイドは始めに意外そうな顔をした。そしてハハハ、と笑った。それから続きの言葉を喋るまでは自分とコレットの影を見つめた。

「——俺が親父に拾われた日、なんだ」

ロイドがうつむき加減でようやく口を開く。「えっ？」とコレットが顔を上げ彼を見ながら聞き返した。

「俺——まだ小さかったから。母さんの事ほとんどおぼえてねえけど。——昔は俺、親父を見る度に泣いてたってさ」 ロイドは少し

辛そうに目を細めうつむき加減で言った。

「そっか……。ごめん。こんな事訊いちゃって」

コレットは彼の横顔を控えめに見つめながら言った。次に風の音に耳を傾けた。そしてロイドから目を逸らした。

ロイドは明るく笑いながら「違うだろ。話してくれて、ありがとうって言えよ」とぶっきらぼうに言い、顔を上げた。それから再び寝転がった。

コレットはその言葉を聞くと彼の方を見た。そして両手を地面につきながら、体ごと彼の方を向き前屈み気味になりながらその目を見た。

「……ロイド。——話してくれて、ありがとう」

コレットが穏やかにそう言うのとロイドは「おう……。ジーニアスには内緒な」と言ってニツとした笑顔を見せると、それを見たコレットも頷いて隣に寝転がった。

二人は暫く静寂を守りつつ、時々お互いに隣を見て目が合っては、クスッと笑って穏やかな時の中に風の音を聞いていた。草の先の朝露——太陽の光に照らされ、一筋の流れ星のように彩られながら。宝石のような——がボタンと音を立てて落ちた。

「ふあ……。日だまりのにおい。朝露の香りがする……」 コレットは両腕を空に翳して伸びをして気持ちよさそうに目を閉じて、口元を軽く抑えてあくびをするとポツリと呟いた。

ロイドは彼女の方をチラッと微笑ましく見ながら「ホント、気持ちいいよな……。寝るなよ、コレット」と言いつつも、自分もその直後にあくびをした。

「今のは、……深呼吸だからな！」　ロイドはすぐに訂正するようにそう言った。

「——ロイドは……、スケッチ描いた？」　コレットは薄目を開けながらそう訊いた。

唐突にそう訊かれたロイドはリフィルから出された、環境学の課題を完全に忘れていて慌てて起き上がった。

「やっべ……」

「私もまだ、なんだ。——一緒に描こ……？」

コレットも焦る彼に続けて起きて脇に置いてあったスケッチブックを手繰り寄せて、彼の横顔に柔らかい笑顔を向けて穏やかに言った。ポプラを思わせる本の表紙は茶と白の混ざったような色。筆入れは麻の小さい布袋のようだった。

ロイドは「スケッチブック、教室に置いて来ちゃった……」とあぐらをかきながら、頭をかいて困った様子で呟いた。

「——じゃあ、私の一緒に使って！」　コレットはそう言って膝立ち状態でロイドの正面に移動すると、スケッチブックを二人の中央に置いて両脚の力を抜いて正座した。

鉛筆を差し出されるとロイドはお礼を言い、彼女の瞳を見て頬を赤らめ照れ笑いをした。

コレットは正座を崩して両脚を揃えて斜め前に添えるように座ると、少し前屈みになりながら一輪の花のスケッチを始めた。

どれぐらい経ったのか、二人がスケッチを終えた頃——

「——よし。じゃあ、戻ろうか」

「うん、早く戻ってリフィル先生に謝らないと」

ロイドが「そうだな」と言っ、二人は校舎へ戻る為片づけを始めた。

コレットは座りながら色鉛筆や砂消しゴム等をしまうと、左手にスケッチブックを抱えた彼が「ほらっ!」と手を差し出した。

「あつ……。ありがと」 コレットは半ば目を点にしながらも、穏やかにそう言うと言手を取って立ち上がった。

離れる彼の手をコレットが名残惜しそうに見ている。「どうした……?」と、その顔を覗き込んで訊いた。

彼女は「何でもない」と言っ、無理やりに笑顔を見せて、先に歩き出した。

ロイドは小走りで彼女の横まで行くと、こちらを見て微笑んだ彼女に微笑み返して同じ歩幅で歩き出した……。

——あなたの笑顔は、いつも私を助けてくれた。

草原の広がる丘を、二人が降り始めた時——

「そーいや……。集場所っ、何処だっけ?」 ロイドはど忘れしたかのようにこぼした。

「学校だよ?」 コレットは隣を歩く彼を少し見上げながら、軽く笑みを浮かべてそう言っ。

ロイドが「ああ、そうだった」というカンジに照れ隠しに頭をか

きながらそう言って、二人は歩いていく……。

二人がイセリアの門の見えるところまで来た時、ロイドが物音に立ち止まる。

(ガサ……)

ロイドが「……なんだ？」と驚いたように声を上げると、立ち止まったコレットもようやく事態を把握して辺りを見回す。青々とした木々が村の周りに生えていた。高く雑草の茂った向こうの垣根は、イセリアと平地を区切るように門前に立てられていた。

その時イセリアの門の向こうからジーニアスが「二人とも良かった——ジョン、見なかった!？」と叫びながら、走ってくる。

その時、イセリアの見張り台の鐘が鳴り響いた。それが二人の耳によく入った。

「何か……あったの？」

コレットは驚いた様子で目を見開いた。息をあげながら立ち止まったジーニアスに訊いた。

ジーニアスの話によれば、エッグベアという魔物が山から下りてきたようだ。その事が村を混乱状態にしている警報が出されたようだ。

二人とも探されているようだ。それにジョンという学校の生徒がまだ戻ってないらしい。

(グオオオオオ……!!)

突如三人の耳に地響きと魔物の吼える声が響く。三人は肩をすばめて顔を見合わせ固まった。

気配を感じて振りかえったロイドの耳に、誰かの声が聞こえてき

た。

「……そこに、誰かいるのか!？」

三人が垣根の前に視線をやると、高く生い茂るの雑草の群れの奥から子どもが助けを求めて一生懸命に手を伸ばしているのが、目に飛び込んできた。

それを見たロイドはコレットにスケッチブックを押しつけて、「待て、今助ける!」と叫びながら走り出した……。

「ロイド!？」 ジーニアスは心配とも驚きともとれる、叫びをあげて彼の無謀さに硬直した。

「ダメっ……!!」

一瞬の事にコレットは反射的に手を伸ばし、声を荒げて呼び止めようとしたが彼の襟からなびく帯を掴めず、指の間をするりと抜けてしまった。

ロイドが子どもの手を掴むのが見えて、駆け寄る二人に「二人とも来るな!」と振り返る事無く言った。

彼は続けて「ジーニアス、木刀持ってこい!」とジーニアスに告げると、コレットには校舎に戻るように言った。

「了解……!」 ジーニアスはそう言うのと門の脇に繋がれた、ノイシュの方へ走って行く。

コレットもジーニアスについて行って、ノイシュの背にジーニアスを乗せると後ろにまたがっていった……。

ジーニアスがノイシュに乗り木刀を持って来た時――

ロイドは子どもを救いだしては居たものの、エッグベアから子どもを護るために対峙していた。

「山に帰れよ、デカ物!! こいつは関係ないんだ……! ——な
んで襲うんだよ!？」

半べそをかいた子どもはあちらこちらにすり傷を負って腰を抜かして、ロイドは両手を広く広げて敵の行く手を阻んでいる。

「ロイドー!」 ジーニアスはこちらを見たロイドに木刀を鞘ごと投げた。

「助かる……! 危ねえから逃げろ!!」

ロイドは右方向から飛んでくるそれを両手で受け取って、背後で腰を抜かして立ち上がれないジョンという子に言った。

ノイシュにまたがるジーニアスが咄然としていたところに、リフィルや畑仕事をする村人達がコレットに引き連れられて走ってきた……。

「先生、ロイドが……!」

「わかってます!! ジーニアス、下がって!」

走りながらコレットの言葉に受け答えつつリフィルはノイシュに乗ったジーニアスを下がらせ、コレットの後についてそう言う木杖を持ってロイドの方へ向かう。

ロイドは両手に握った鞘の面で手を滑らせながら木刀の柄を逆手に握って、鞘を投げ落としながら腕を交差させて魔物に二本の木刀を真っすぐに向けて構えた。

「おら、かかって来いよ……！」　ロイドはエックベアを威嚇しながら、様子を窺いながら足をゆっくり動かしていく。

ジョンという子どもをリフィルが抱き上げたのを横目で確認したロイドは、「後は私達に任せなさい」という村長の声を聞きながらエックベアに再び視線を戻した。門の前から村人達が魔物と対峙する少年に、言葉を投げかける。

エックベアと向き合いながらロイドは横歩きで周囲を回って、エックベアはその動きを追うように牙をむき出してその移動する方向へ向く。

さらに横歩きで周りを回りながら、エックベアにゆっくり近づいていく……。

「ロイドっ……、もういいよ！」

「コレット……」

コレットの言葉で我に返ったように振り返ったロイド。彼は、木刀を下ろしてしっかりと彼女の方を向いた。

彼女は続けて「そのコ怖がってるよ」と言って、見つめ合う二人をよそに村人達とジーニアスとリフィルは驚愕した表情になった。彼女の瞳を見つめた少年は、背後のエックベアが覆い被さってくるのに気づいていない。

「ロイド、後ろっ……！」　コレットは蒼い瞳を大きく開きそう言いながら、ロイドの方へ走り出した。

茫然と口を開け恐る恐る後ろへ顔を向けようとした。次の瞬間に振り上げられた太い爪。させるまい、とコレットはロイドを押し飛ばして回避させようとした。

両方の腕を振り上げている魔物を見上げて皆が悲鳴を上げた。コレットが避けようとした時にはもう腕が振り下ろされていて、彼女は恐怖ではなく何かを覚悟したかのように目を閉じた。頭を起こして少女に危険が迫るのを見た少年。左手甲の手袋の上に巻かれた包帯の隙間から光が洩れだした。

「バカ野郎ー！！」 倒れたロイドは起き上がりながら声を張り上げた。そして木刀を握りしめた。勢いのままに宙返りしてエックベアに飛び乗った。

村人は畑道具を持ちながら「コレットが！」と言って、近々神子となる彼女の身を守ろうと大勢で走り出そうとした。しかしロイドの行動を見て、その上に地響きに恐れ立ち止まった。

振り下ろされたエックベアの爪は彼が飛び乗った事で軌道がずれて、彼女のすぐ横の地面に食い込んだ。

木刀を持ちながらもエックベアの頭にしがみついて、「早く逃げる！！」と必死な様子で彼女を見下ろして言った。もがいて暴れまわる魔物の背中の上で、鳶色の髪の少年は顔を歪めた。

コレットはロイドの目を見上げながら後ずさり、彼を信じるかのように目を一瞬閉じる。そして後ろの村の門の方へ足を向けて走り出した。

「あっ……！！？」

コレットは大勢の村人の中へ走っていく途中、視界がオレンジ色になったようにリフィルに抱き止められて、高く驚きの声を上げた。

「もうっ……！ 破天荒なんだから」 リフィルがあきれきったような表情で、涙を浮かべてコレットを抱き止めた。

ロイドが振り落とされそうになった時。声を聞きつけてきたフランクや村人達が声を上げ、身じろいで駆け寄ろうとするがエックベアは激しく暴れていた。少し黒ずんで錆びた刺す又や槍を、魔物に向ける。そうして村人らは距離を取りながら近寄っていく。

ノイシュに乗ってロイドの正面まで見える位置に来たジーニアスは「ロイド飛んで！」と言って、それを聞いていたロイドはエックベアの背中から飛び跳ねると村人達を飛び越えた。

空中を回転しながら彼はノイシュ達の前に、雑草の茂った凸凹の地面に、重々しく音と砂埃を立てて着地した。

「お前……。わりいけど、これ以上イセリアで暴れるなら容赦しねえぞ！」　ロイドは魔物を見上げて眉をつり上げてそう言うのと、両手の木刀を振って回して逆手から持ち替えた。

エッグベアは巨大な身体で歩きながら怯えて退く村人たちを見下ろしながら、ロイドに向けて走って特攻してきた……。

「ロイドー！」　心配するリフィルに抑えられながらもコレットは彼の名を大声で呼んだ。

ロイドは突進してくるエッグベアの身体を横に跳んで避けつつ、着地した低い体勢から木刀を二本向けて構えた。そして右側から顔面に狙いを定めた。

左手に握った木刀の先を脇に構えながらまっすぐに向けて「悪い……！」と謝る。仕方がなかった。彼はもはや攻撃を加えるしかなく、村人たちや友達の心配をよそに屈んで吼えるエッグベアに真っ向から対峙した。

「……でええい！！」　ロイドは四連突きの連打を素早く繰り返して、締めを右の木刀の先を強めに叩きつけた。

エッグベアはよろめいた。その隙に村人たちは集団で寄ってたかって農業道具でその魔物を叩き始めた。

ロイドが慌てながらやめろ、と言う。しかし声はむなしく。大勢の村人たちの声でかき消された。

結局。エッグベアは殺されてしまう。ジョンという子は今日は家へ帰されロイド達は授業に戻された。

暗い表情で授業を一区切りすると給食の時間になった――

「死ん……じゃったね」

ロイドの方へ椅子を向けてその横のコレットと三人で食事をしている時に、ジーニアスが落ち込み気味に呟いた。周りがいつもと変わらず賑わいでいる中で、事件に遭遇した三人は暗めだった。

食事中は手袋を外している彼は大きなパンを一斤無理やりに頬張りながらジーニアスと隣のコレットを見て、「ほら、食おうぜ」ともごもご言いながらパンを飲み込むと二人に笑いかけた。

「……………」

いつもは食べ物をお口に入れながら喋るのをジーニアスが注意するのに、彼にはその元気がなかった。

コレットもまたエッグベアが殺された事、二人を危険な目に遭わせた事を、気に病んで落ち込んでいた。

ロイドはうつむき加減な二人の肩に手を回して、より間近で白い歯を見せて笑顔をつくって見せた。

「ありがと……」 コレットは軽く微笑んで、ロイドにお礼を言った。

「ロイド……」 ジーニアスは少し笑うと嬉しそうに声を震わせた。

リフィルは教室の一番前でそのやり取りを、微笑ましく見ていた。

給食後の授業――

ロイドは左手で頬杖をつきながら、半分だけ開いた目を黒板に向けて半ば意識は眠っていた。うつろな瞳は、どこを見ているのかすら、もはや誰にも分からない。

「古代大戦は、勇者ミトス達の活躍によって終結されました」

「……よろしい。その後勇者ミトスは女神マーテルと契約して、戦乱の原因である悪の組織――ディザイアンを封印しました」

ジーニアスが教科書を広げながら立ち上がってそう言うのと、頷いて彼を座らせたリフィルが黒板の前に立ちながら説明を続けた。

「しかし現在ではこの封印が弱まり、ディザイアンは復活し始めて町や人を襲っています。皆さんも知っているとありますが、ディザイアンは殆どがハーフェルフで構成されているそうです。このイセリアは何によって守られていますか……？」 リフィルは一拍置いて、少し深刻な表情で続けて説明して問題を出した。

ジーニアスやコレットや何人もの人が手を上げてほぼ全員が手を挙げると、リフィルが続けて説明する。

「そう。親からも聞かされているでしょう……。ディザイアンへ干渉しない代わりに彼方も、此方へ干渉しない決まり。――不可侵契約です。では、この戦乱の原因となったディザイアンを封印するに

は？ ……答えられる人」

リフィルは問題を更に出すと、顔を上げて手を挙げる人を探した。ただ一人手を挙げるジーニアスに、「では、ジーニアス」と指名して彼は席を立ち上がった。

「女神マーテルを復活させる儀式、世界再生です」 そう言ったジーニアスはリフィルが頷くと、席についた。

「そうです。世界再生は聖地に眠る女神マーテルを復活させ、ディザイアンを封印します。このシルヴァラントにマナを満ちさせて、マナの減少による日照りや食料不足から救い出してくれる唯一の救済ともいえる儀式です。ではロイド、次の図の文章を——」

リフィルが説明を終えた頃に、ロイドが首を傾けてかくかくと眠りこけているのに気づいた。

授業中に眠るロイドを呆れた顔で見て怒らないように小さくため息をついたリフィルは、「また寝てる」と低めの声で呟くとあからさまに作り笑顔で隣のコレットを見て指名した。

「では、——コレット。彼の代わりに図表一の文を読んでください……」

「あ……。はいっ！」

コレットは珍しく授業中にボーっと考え事をしていたらしく、意識を現実に戻すと慌てて立ち上がって返事をしながら文章を探した。図表には壁画の写真が刷られていて、虹色の翼を生やした金髪の少年が薄緑の髪の女神マーテルともとれる女性と共に、描かれている。

「……かつて、世界の中心にはマナ生む大樹があった。しかし争い

で木は枯れ、かわりに勇者の命がマナになった。それを嘆いた女神マーテルは、天へ消えた。この時女神は、天使を遣わした。“私が眠れば、世界は滅ぶ。私を目覚めさせよ”——天使は神子を生み、神子は天へ続く塔を目指す。これが、世界再生の始まりである」コレットは凜とした様子で読み終わると、自信なさげにリフィルの顔を見た。

「はい、ありがとう。座って？」

リフィルは微笑みながらそう言って、コレットを座らせた。彼女は教室を回りながら「唯一の色付き印刷です——」と、みんなに言い聞かせるように授業を続けた。

放課後の夕暮れ時——

「……ああ〜！ リフィル先生、勘弁してくれ〜！」 ロイドは席に着いたまま、机に突っ伏して頭を抱えている。

「ダメです！ ……もう。コレットに代わりに読ませておきながら、反省文の一つも書きたくないなんて。怠慢も良いところですよ！」

ロイドは授業や掃除が終わった後によく起きて、机の前で腕を組みながら立つリフィルが彼を見下ろしながら叱っていた。夕焼けの光に染まった教室は教師と叱られる生徒と、教卓に肘を置いてそれを傍観する生徒が二人居た。

「……読ませたのは先生だろ〜？」

「へ理屈を言わないっ!!」

リフィルはへ理屈を言うロイドに少し大声でそう言うと、机の端

を叩いた。

(ドン!!)

「……はいっ!!」 ロイドはその揺れと音に、返事をしながら飛び上がって背筋をピンと伸ばした。

傍観者のジーニアスは「自業自得だよね……」と呆れたようにため息混じりに呟いて、苦笑いで「うん」とコレットは頷いた。教卓の所から見ていたコレットとジーニアスは、助けたい気持ちもあったが彼の為を思っで見守っていた。

「今日の戸締まり当番は特別にあなたにしましたから。——では、書いてから帰る事。良いですね……?」

「えーっ!?!」

「えー、じゃありません。返事は、はい! あなたが寝てるのを起こさないでって言いながら、あなたの掃除担当場所までやってくれた友達が居るんですからね! ——さあ、頑張って!」 不満を漏らすロイドを叱ったかと思えば、リフィルは励ますような口調で言った。彼女の脳裏には掃除担当を代わりに引き受けたコレットの笑顔が浮かぶ。

リフィルはコレット達になるべく早く帰るように言う。ロイドが頷いて鉛筆を持つのをみると安心したように学校を後にした。

彼が反省文を書き終える頃には。もう外はすっかり、暗くなっていた。灯りのない教室では、ジーニアスが剣玉の先に火を灯して照らしていた。

二人とも一緒に残って居てくれた。何の見返りも求めず笑顔で、ロイドのいたらない所に多くの知恵を貸してくれた。

「——ごめんな。二人とも、こんな時間まで」　ロイドは窓閉めをしてくれている二人に、そう言いながら反省文の紙を教卓に置いた。

「いいよ、そんな」

「僕ら親友でしょ！　……反省文の紙、僕が姉さんに渡しとくよ」

コレットが青いリュックサックを背負いながら笑顔でそう言うと、麻色のリュックを背負ったジーニアスも後から笑顔で言っけてロイドの机の前に来た。

ロイド達が校舎から出てセイジ姉弟の家の前に着いた頃――

「じゃあ、また明日！」

「おう！　先生に、よろしくな！」

ロイドとジーニアスが笑顔で短い会話を交わして二人が手を振って彼が家に入るのを見た後、二人で微妙な距離を開きながら森側の門に向け夜道を歩き出した。薄暗い道はたいまつのみかりと月明かりで照らされていた。沈黙を守る二人。ただ風の音だけをきいていた。

彼は時々黒いショルダーバックを肩に持ち上げるような仕草をして、なるべくゆっくり歩いていた。その行動をコレットも不思議がる事なく歩幅を合わせた。いつもの光景だが、互いに歩く速度を合わせている。

――時々もの凄くドキドキしたんだ。あなたと、二人っきりで居るだけで。

コレットの家まで続く道に入ろうとしてロイドが左へ曲がろうと

した時、彼女は「門まで見送るよ」と言って横顔を見上げて彼はなにも言わずに頷く。それから二人は少し先に見える門へ歩きだした……。

いつも歩く道。それを二人は初々しい様子でうつむきながら歩いて行き、ようやく門に着いた。

「……今日はありがとな！　じゃ、——俺帰るよ」　ロイドは門の辺で待ってたノイシュを撫でると、コレットの方を振り返って言った。

「……うん」　コレットは名残惜しそうに頷いた。

ロイドがノイシュの背に右足からまたがって乗るのを、コレットはリュックの肩ひもを握りながら目を泳がせて見ている。

「あ……。手紙書くから、ロイド」

「——おう！　手紙、待ってるよ！」

まるで引き止めるかのようにコレットが慌てて言う。ノイシュの上に乗ったロイドは、たてがみを掴みながら屈んで笑顔で返事した。彼女ははにかんだ笑顔を見せて元気一杯に手を振った。

「気をつけて帰れよー！」　ノイシュに乗った彼は森の方へ向いて彼女に背を向ける。そして、コレットに手を振り言った。

ノイシュが砂埃を立てて走り出した。ロイド達の姿が森の中へ消えていくのを彼女はずっと見守っていた……。

家に帰ったコレットは夜遅くまで机に座って、手紙を書いていた

白い長袖のパジャマを着て少し前屈みになりながら、一心不乱に鉛筆の先を走らせた。ブロンドの髪が木製の机に垂れ下がって、優しい色のハーモニーを奏でている。

「出来た……！」　コレットは嬉しそうにそう言うと、手紙を天井の灯りにかざした。

時間をかけて丁寧に手紙を三つ折りにしたコレットはそれを緑色の封筒へ入れて、夜中に家の外の庭へ出るとサンダルを素足に履いてスキップしながら、夜明け前に回収が行われる伝書鳩のポストへ手紙を入れた。

明け方。ロイドは目をこすりながらポストを覗いた――

彼は上に肩の露出した黒い服を着ていて、下には薄めの生地の子のズボンを履いていて裸足にサンダルを履いている。朝露の滴る芝生を、ゆっくり少年は踏みしめる。

「あっ………」　緑色の封筒の送り主を見たロイドは、目を大きく開けた。

それから嬉しそうに微笑んだ。そして家へ戻っていった。

――恥ずかしくて言えないけど、あの日に手紙に書けば良かったと思うてる。あなたと歩いた夜道、あなたと居た多くの時間を恋しく思う。……ありがとう、ロイド。本当はね、あなたが誰よりも好き。だから私が何処にいても、いつでも笑っていてください。

—
E
n
d

o
f

S
c
e
n
e.
. .

（後書き）

シンフォニアの初の短編小説を頑張って書きましたので、よろしくお願いします。

※ご感想やご意見などお時間ありましたら、穏便にお願いいたします
すm（　　）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7217n/>

～テイルズ オブ シンフォニア～あの日の、記憶。

2011年3月4日06時23分発行